

**透明感と奥行き感のある、いきいきとした肌質感\*を再現できるファンデーションを開発  
素肌の自然な色ムラを再現することで透明感や立体感を実現**

ポーラ・オルビスグループのポーラ化成工業株式会社（本社：神奈川県横浜市、社長：釘丸和也）は、アートの画法に用いられる『濁りのないきれいな色を表現できる視覚混合の効果』と、『奥行き感をつくる色立体視の効果』に着目し、透明感と奥行き感のある、いきいきとした肌質感\*を演出するファンデーションを開発しました。本技術は、ポーラ・オルビスグループの株式会社ポーラから来春発売される製品に活用されます。 ※カバー感がなく素肌のきれいな質感が残っている状態

**開発の背景**

ファンデーションは、粉体複合化技術や、粉体コーティング技術などでツヤや素肌感を演出しています。しかし、これまでの技術だけでは、実物の素肌のような『透明感』や『奥行き感』、『いきいき感』を再現することは難しく、のっぺりとした人工的な仕上がりとになってしまいう傾向にありました。

この課題を解決するため、アートの世界で使われる2つの技術に着目しました。『視覚混合の効果』と、『色立体視の効果』(図1)です。人の皮膚は一見、均一に見えても、拡大して観察すると色味や明るさにムラがあります。一方、従来のファンデーションは肌の色を均一に整えることに主眼が置かれ、単色のみで構成されていました。

そこで本研究では、むしろ素肌の自然な色ムラを再現することが『透明感』や『奥行き感』、『いきいき感』を与えるのではないかと考え、素肌のトラブルを隠しつつも、あえて色ムラができるファンデーションの開発に至りました。

**あえて色ムラをつくるファンデーション**

赤、青、緑、黄の4色のパウダーを別々のスポットに充填した、多色パウダーファンデーションを開発しました。

これをパフで肌に塗布すると、自然と色ムラのあるメイク膜ができ、いきいきとした肌質感が生まれます(図2)。さらに、塗ったときに適度な色ムラが生まれる充填面積も突き止めました(メイク膜の色ムラの様子：補足資料1)。

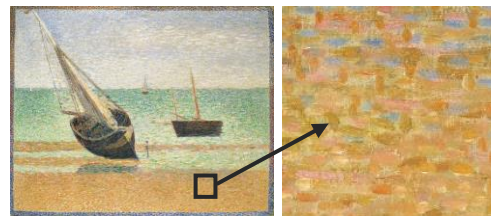
**仕上がりの違いは一目瞭然**

新たに開発した多色ファンデーションは、従来型の単色ファンデーションに比べて専門パネルによる評価で『透明感』70%、『奥行き感』、『いきいき感』ともに80%以上もの支持を得ました(補足資料2)。このことから、多色ファンデーションは今までにない素肌の美しさを再現していると考えられます。

図1 視覚混合の効果・色立体視の効果とは

<視覚混合>

絵の具の色は混ぜれば混ぜるほど濁って暗くなる。色を混ぜずに小さな点で並べ、鑑賞者の目の中で混色することで、濁らず、透明感のある色彩をつくる。



ジョルジュ・スーラ《グランカンの干潮》1885（ポーラ美術館収蔵）

<色立体視>

暖色系と寒色系を組み合わせることで、奥行きや立体感をうみだす。



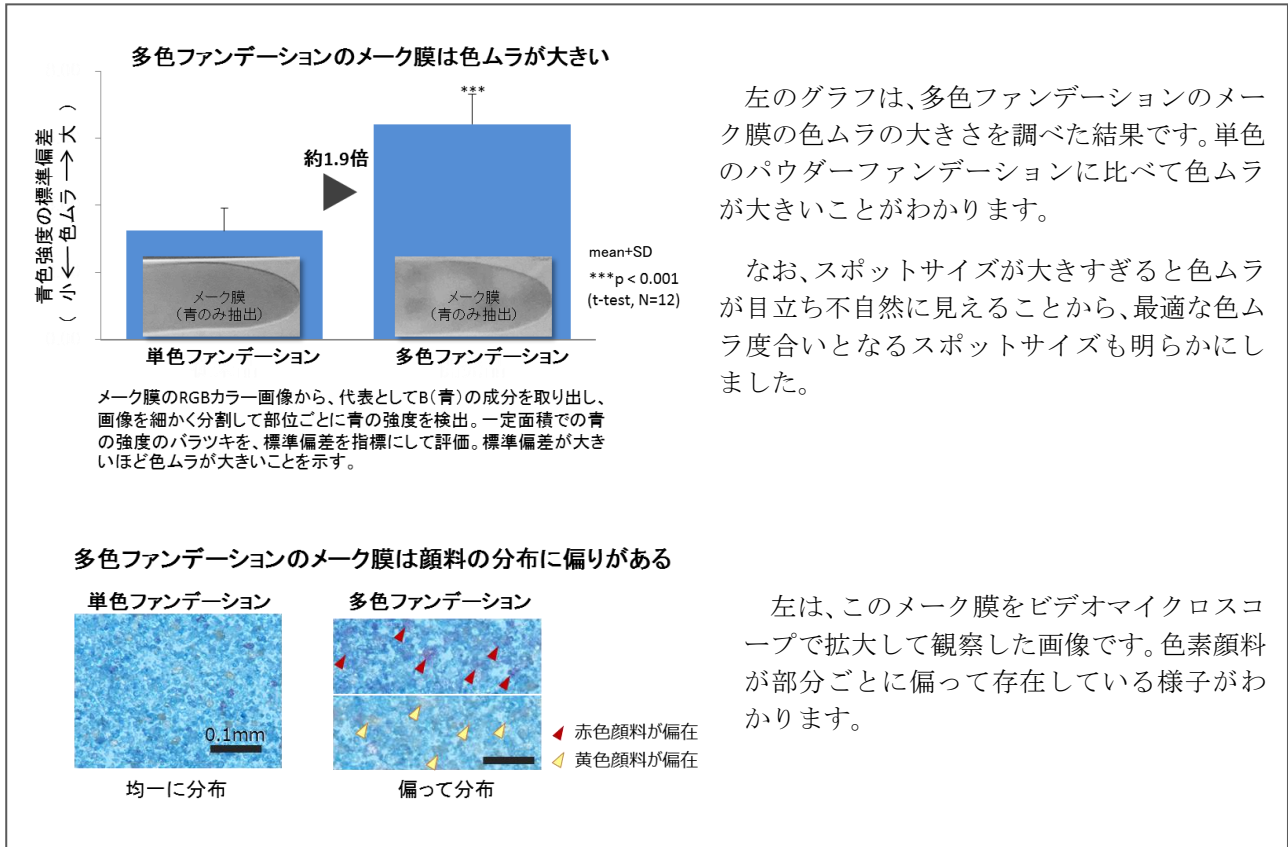
図2 単色ファンデーションと多色ファンデーションの違い

	<従来品> 単色ファンデーション (あらかじめ4色を混合)	<開発品> 多色ファンデーション (4色を分けて充填)
外観		
塗布時のメイク膜	色ムラなし	色ムラあり
仕上がり		

透明感・奥行きのないのっぺりした仕上がり。色味にも若干のくすみ。  
透明感・奥行きのある、いきいきとした肌を再現。

※内容物の組成は単色ファンデーションと多色ファンデーションで同じ

## 【補足資料 1】メイク膜の色ムラの様子



## 【補足資料 2】ファンデーションの仕上がり評価

